

二〇二六年度入学試験問題

国

語

(六〇分)

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、問題冊子は開かないでください。
- 二、この問題冊子は23ページあります。試験中、ページの脱落等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 三、解答用紙(マークシート)の汚れなどに気づいた場合も、同様に知らせてください。
- 四、解答は、すべて解答用紙(マークシート)に記入し、解答用紙(マークシート)の枠外には、なにも書かないでください。
- 五、解答番号は、1～40まであります。
解答用紙(マークシート)には、問題番号が1～50、選択肢が①～⑩まで印刷されていますが、解答にあたっては、各設問に指示された選択肢の数の中から選んで解答してください。
- 六、マークは必ずHBの黒鉛筆を使用し、訂正する場合は、完全に消してからマークしてください。
- 七、監督者の指示に従って、解答用紙(マークシート)に解答する科目・受験番号をマークするとともに、受験番号および氏名を記入してください。
- 八、解答する科目、受験番号、解答が正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 九、試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題一

俊一郎は、妻と離婚したのを機に会社も退職し、帰郷して家にとじこもりながら静かに暮らしていた。以下は、俊一郎（かれ）が、帰郷して四年目を迎える秋の日の場面である。次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

秋が深まった頃、かれは、県内紙の小さな記事に眼をとめた。隣接した県の川沿いの町に住む老人が、ほとんど絶滅した螢の人工飼育につとめ、ようやくその夏、五十匹近い螢を産み出すことに成功し、来年にはさらに多くの螢を誕生させる期待が寄せられている、と書かれていた。

かれは、その記事に不思議な感動をおぼえた。螢を飼育し増殖させてみても、金銭の対象にはならない。食料になる動植物などのように、人間の実生活を利用するものではなく、わずかな期間、その光が人の眼を楽しませてくれるにすぎない。

螢の飼育方法は、おそらく微妙なものにちがいがなく、なんの実質的な報いもないのに螢の光をよみがえらせようと努力している人間が実在していることに、興味をいだいた。

近くの小都市が空襲で焼かれた夜、炎に染まった空の反映で、朱色をおびた螢の光が飛び交っていた情景が思い起された。螢は町とともにあったが、それもほとんど見られなくなっている。もしも、川筋に螢の光が舞うようになったら、とかれは思った。数は少くとも、それらが闇を明るくせれば、町は自分の故郷として、一層強く自分の内部に根を張るにちがいはなかった。

数日後、かれは、ポストンバッグを手にかを家を出た。国鉄の駅から普通列車に乗り、小駅で降りてバスで老人の住む町に行った。

町は、旧街道に面した古い宿場で、明治時代に鉄道が通ることに反対したためさびれたことで知られている。由緒正しい寺があり、古い家並も残っていた。

俊一郎は、道をたずねながら老人の家の前に立った。門がまえの大きな家だったが、土塀の壁土ははがれ、瓦も落ちていた。

かれは、門をくぐった。家の背後は孟宗竹の繁る高みになっていて、藁ぶきの屋根には苔と雑草がのっている。前庭に、幹の太い櫟が枝葉をひろげていた。

老人が、庭石に腰をおろして空に眼をむけていた。髪は白く、体格は逞しい。

俊一郎は近づくと、

「本堂さんでしょうか」

と、言った。

老人は立つと、さようでございませう、と折目正しい言葉で答えた。

俊一郎は、新聞記事のことを口にし、自分も螢の人工飼育をしてみたいと思い、教えを乞いに來た、と言った。

老人は、黙っていた。その表情に、俊一郎はそうした用件で訪れた自分に好感をいだいていないらしいことに気づいた。

「お教えいただけませんかでしょうか」

かれは、恐るおそるたずねた。

「螢などを、なぜ……」

^d老人の表情は、かたい。

俊一郎は、高校生時代まで眼にした螢がほとんど町に見られなくなり、東京の生活をはなれて帰郷した自分には、螢を眼にできぬのは堪えがたいことだ、と言った。

「ただ、見たいというだけですか」

「その通りです。川筋を螢が光って飛ぶのを眼にできれば、と願っています」

老人が、口もとをゆるめた。

「あの記事が新聞に出ましたら、翌日、大きなホテルの支配人という男が來ましたよ。ホテルの庭に螢を放して、子供連れの客に団扇^{うちわ}をもたせ捕え^{つかま}させる催しを企画したいのです。螢を客集めに使おうというのです。断^{こと}わりました」

老人は、顔をしかめた。

「考えそうなことですね」

^x俊一郎は、苦笑した。

「呆^{あき}れたものです。苦勞をして産み出した螢を金銭の代償にされ、団扇でたたき落^おされてはたまりませんよ。螢をなんだと思っているんでしょうかね」

老人の眼に、憤りの色が浮かんた。

俊一郎は、口をつぐんでいた。螢の生命をよみがえらせようと努めている老人が、それを金銭を得るための道具に利用しようとする人間に対して激しい怒りをいだくのは当然だ、と思った。

「あなたには、教えてさしあげてもよさそうだ。この年になると、人の見分けもつく。私もあなたと同じように、螢の光が舞うのを見たいだけの目的ではじめたことです。新聞の記事にされるのも、実は迷惑でしてね。自分が好きでやっているにすぎないことなのですから……」

老人の顔に、A 表情が浮かんだ。

「この町の川筋にも、螢が飛んでいたのですね」

俊一郎は、家の方に歩き出した老人にたずねた。

「たくさんいましてね、それは見事だった。天の川の星が群れ飛ぶように……」

老人は振返^{ふりかえ}つて言うと、川の上流に観光地が出来てホテルが三つ建ち、そこから排出された汚水で螢の棲息^{せいそく}する環境が失われた、と説明した。

俊一郎は、老人にうながされて家にあがつた。

床の間の傍^{そば}に、金網で張られた箱がいくつも並んでいた。

「産卵箱です」

老人は、箱を指さした。

まず、螢の舞う季節に成虫をとらえ、産卵箱に入れる。雌と雄の見分け方は簡単で、大きい方が雌。また、腹には黄色い節があるが、それが一節であるのは雌、二節あるのは雄で、そこから光を放つので、雄の方が光が強いという。

交尾を終えた雌は、箱の中に置かれた藻に、三百から五百個の卵を産みつける。卵は、一カ月で孵化^{ふか}する。

「ここまでは比較的簡単で、孵化した幼虫を成虫にまで持つてゆくのが、容易ではない」

老人は、家の外に出ると、庭の奥に歩いて行った。

そこには階段状になった溝がつくられ、澄んだ水が流れていた。

老人は、溝のふちに立った。

「幼虫をこの溝に放つ。さらに幼虫の餌である川二ナも入れる」

「川二ナ？」

「カタツムリのような巻貝で、流れの早い川にいます。幼虫は、川二ナを食べて成長するので、川二ナを川で探して入れてやらなければなりません」

「螢の幼虫は、水中生活をするわけですね」

「そうです。そして、四月頃、夜間に川から這^はい上がって、土の中にもぐる。そこで蛹^{さなぎ}になり、五月下旬に成虫として這い出し、飛ぶのです」

「螢の卵は、一年たつてようやく成虫になるのですか。人工飼育も一年がかりというわけですね」

老人は、うなずいた。

俊一郎は、呆れた。新聞記事では、老人が五十匹の螢の成虫化に成功したというが、わずかそれだけの数の螢を産み出すために、一年間努力をかさねたことになる。老人が、団扇でたたき落されてはたまらない、と言った言葉も、無理はない、とあらためて思った。

老人は、飼育する上での注意を口にし、俊一郎は、それをノートに記した。注意事項は多く、螢を産み出すことが至難であるのを知った。

老人が、螢の飼育に関心をいだいたのは、山口県下を旅行している時、県内紙で飼育をしている人がいることを知ったからであった。かれは、自分でも手がけてみようと思ひ、その飼育家のもとを訪れ、知識を得たのだという。

「結局は、あなたと同じように

B

わけです」

老人は、笑った。

その後、かれは、老人のもとに通つては指導を受けるようになった。

まず、卵を得るためには成虫を入手しなければならなかった。

かれは、人づてに町から三十キロほどはなれた支流に螢の飛び交う地があることを知った。また、老人の指示通りに産卵箱をつくり、井戸水を流す人工溝を設け、そのふちに幼虫が上陸し土中に身をひそめるのに適した環境を整えた。

やがて、初夏の季節が訪れ、かれは車で螢の棲息地に行き、螢を捕えて産卵箱に入れた。

藻に微細な卵が産みつけられ、やがて孵化して幼虫になり、それを人工溝の水の中に放った。と同時に、螢の棲息地で川二ノを採取し、溝に入れた。その経過を老人に伝えていたが、十二月中旬、老人の家族から電話で死が伝えられた。川二ノを採取に行った老人は、寒気にふれて肺炎にかかり、急死したという。

かれは、早速、葬儀に赴いた。旧家らしく焼香客が多く、町の有力者の花輪や生花が並んでいた。

俊一郎は、庭の奥に打ち捨てられたようになってる人工溝をながめていた。

かれにとって老人の死は痛手であったが、かれは独力で螢を産み出すことを決心した。

(吉村昭「螢の舞い」による)

問一

傍線部 a 「不思議な感動をおぼえた」とあるが、どのようなことに感動したのか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 1。

- 1 隣りの県の川沿いの町で、いなくなったはずの螢が再びその土地に戻ってきて人の眼を楽しませていること。
- 2 人工飼育の技術が発達したことで、ほとんど絶滅しかけていた螢が来年には多く見られる可能性があること。
- 3 自分の金銭的な収入はかえりみずに、町の人々の実生活を利用するために螢を人工飼育している人がいること。
- 4 実質的な利得に結びつくわけでもないのに、螢を人工的によみがえらせようと努力している人物がいること。

問二

傍線部 b・c・e の語句の意味はどれか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。解答番号は 2 4。

b 「根を張る」

- 1 共鳴する
- 2 埋もれる
- 3 定着する
- 4 記憶される

c 「折目正しい」

- 1 礼儀のある
- 2 他人行儀な
- 3 調子の合う
- 4 聞こえのよい

e 「つぐんで」

- 1 ゆがめて
- 2 とざして
- 3 とがらせて
- 4 うごめかせて

問三

傍線部 d「老人の表情は、かたい」とあるが、なぜ「老人」はかたい表情をしていたのか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 5。

- 1 螢の人工飼育は自分が好きでやっているわけではないのに、事情も知らずに教えを乞うてくる俊一郎に不快感を抱いたから。
- 2 螢を営利目的で利用しようとする人間を知っていたため、螢に興味を示している俊一郎にも少なからず警戒心があったから。
- 3 螢のことでわざわざ自分を訪ねてくるのは不自然であり、目的が別にあるのではないかと俊一郎のことを不審に感じたから。
- 4 螢を人の手で育てるには相当な手間と覚悟が必要であり、螢をただ見たいだけだという俊一郎の動機は軽薄だと思ったから。

問四

空欄

A

に入る語句はなにか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 6。

- 1 怒りの
- 2 あきらめの
- 3 懐かしい
- 4 やわらいだ

問五

傍線部 f「俊一郎は、老人にうながされて家にあがった」とあるが、「老人」が家で俊一郎にした螢についての説明はどのようなものだったか。次の 1～4 のうちから適当でないものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 7。

- 1 螢は雄の放つ光のほうが強く、雌雄の光の強さの違いは腹にある黄色い節の太さで決まる。
- 2 螢は産卵箱の中にある藻に数百個の卵を産みつけ、卵はそこからひと月くらいで孵化する。
- 3 螢は幼虫期に水の中で川二ナを餌として食べ、その後土の中に移動して蛹となって過ごす。
- 4 螢は卵から幼虫まではまだ簡単に育てられるが、そこから幼虫が成虫になるまでが難しい。

問六 波線部 X「俊一郎は、苦笑した」から波線部 Y「俊一郎は、呆れた」に至るまでの、俊一郎の心情の変化はどのようなものか。

次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 8。

- 1 Xでは、螢に対する思いに老人と自分との温度差を感じて適当にあいづちを打つような感覚で「苦笑した」が、Yでは、老人がなぜホテルの支配人に激しく怒りを覚えていたのか詳しい理由が分かり、老人に共感して「呆れた」思いになっている。
- 2 Xでは、螢を金銭のために使おうというずる賢さに可笑しさを感じて「苦笑した」が、Yでは、老人の話で日本の螢が人間の都合によって絶滅の危機に追いやられてきたという事の重大さを知り、呑気に構えていた自分に「呆れた」思いでいる。
- 3 Xでは、螢を人間の都合で利用しようとするありがちな考えに自然と「苦笑した」が、Yでは、螢に対する老人の思いの強さや螢を成虫まで育て上げることの難しさを知り、その途方のなさどホテルの支配人の軽率さに心底「呆れた」思いでいる。
- 4 Xでは、螢に特別な感情を抱きホテルの支配人を嫌悪する老人に共感する思いで「苦笑した」が、Yでは、螢の人工飼育が一年がかりという大規模な作業であることを知り、螢の飼育に異様な執念を抱いている老人に「呆れた」思いになっている。

問七 空欄 B に入る語句はなにか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 9。

- 1 旅の途中で螢の飼育を見物した
- 2 他者に導かれるままにはじめた
- 3 新聞記事が仲立ちをしてくれた
- 4 独学で自分の手法をものにした

問八 傍線部 g「かれは、老人のもとに通つては指導を受けるようになった」とあるが、老人はなぜ俊一郎に螢の人工飼育を教えてやる気になったのか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 10。

- 1 俊一郎が自分と同じく、光を放ち飛ぶ螢の姿を純粋に追い求めていることが分かったから。
- 2 俊一郎は自分よりも若く、手間のかかる人工飼育の作業を能率的にこなせると思ったから。
- 3 俊一郎のような礼儀正しい人なら、老い先の短い自分の面倒を見てくれると考えたから。
- 4 俊一郎を通じて、より多くの人に螢の人工飼育の現状を知ってもらえると期待したから。

問九

傍線部h「庭の奥に打ち捨てられたようになって人工溝をながめていた」とあるが、このときの俊一郎の心情はどのようなものか。次の1～4のうちから適当でないものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 11。

1 無念

2 悲哀

3 覚悟

4 憤怒

問一〇

本文の表現について説明したものはどれか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 12。

1 老人の話を聞いているときの主人公の表情の変化を強調的に描くことで、もともとは気さくな人物であると思っていた老人の印象が主人公のなかで大きく変化したことを表している。

2 老人とホテルの支配人が会話する場面を挿話として臨場的に描くことで、抜け目のない支配人の人柄や老人がかれに対して抱いた嫌悪感を読者にありありと伝わるように表している。

3 螢を中心に他の動植物など自然の一年間の変化を色彩豊かに描くことで、主人公が老人から教えてもらったとおりの手順で螢の人工飼育にいそしんでいる姿を生き生きと表している。

4 三人称の視点で語りつつも主人公の内面に寄り添いながら心情を描くことで、老人の螢への思いに共感した主人公がかれの亡き後もその意志を継ごうと意を固めるさまを表している。

問題二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

青年の時は、だれでもつまらないことに熱情をもつものだ。

その頃、地方の或る高等学校に居た私は、毎年初夏の季節になると、きまって一つの熱情にとりつかれた。それは何でもないうつまらぬことで、或る私の好きな夏帽子を、被^{かぶ}てみたいという願^{ねが}いである。その好きな帽子というのはパナマ帽でもなくタスカンでもなく、あの海老茶色^{えびぢや}のリボン^aを巻いた、一高^(注1)の夏帽子だったのだ。

どうしてそんなにまで、あの学生帽子が好きだったのか、自分ながらよく解^{わか}らない。多分私は、その頃愛読した森鷗外^{もりおうがい}氏の『青年』や、夏目漱石^{なつめそうせき}氏の学生小説などから一高の学生たちを聯想^{れんそう}し、それが初夏の青葉の中で、上野の森などを散歩している、彼等^{かれら}の夏帽子を表象させ、聯想心理に結合した為^{ため}であろう。

とにかく私は、あの海老茶色のリボンを考え、その書生帽子を思うだけでも、ふしぎになつかしい独逸^{ドイツ}の戯曲、アルト・ハイデルベルヒを聯想して、夏の青葉にそよいでくる海の郷愁を感じたりした。

その頃私の居た地方の高等学校では、真紅色のリボンに二本の白線を入れた帽子を、一高に準じて制定して居た。私はそれが厭^{いと}だったので、白線の上に赤インキを塗りつけたり、真紅色の上に紫絵具^{えのぐ}をこすったりして、無理に一高の帽子にマギ^bらして居た。だがとうとう、熱情が押えがたくなつて来たので、或夏^{ある}の休暇に上京して、本郷^{ほんこう}の帽子屋から、一高の制定帽子を買ってしまった。

しかしそれを買った後では、つまらない悔恨にくやまされた。そんなものを買ったところで、実際の一高生徒でもない自分が、まさか^{はずか}に気恥しく、被^{かぶ}つて歩くわけにも行かなかったから。

私は人の居ないところで、どこか内証^{ないしよ}に帽子を被り、鷗外博士の『青年』やハイデルベルヒを聯想しつつ、自分がその主人公である如く、空想裡^{くうそうり}の悦楽に耽^{ふけ}りたいと考えた。その強い欲情は、どうしても押えることができなかった。そこで、或夏、七月の休暇になると同時に、ひそかに帽子^(注3)を行李に入れて、日光の山奥にある中禪寺^{ちゅうぜんじ}の避暑地へ行^いった。もちろん宿屋は、湖畔のレーキホテルを選定した。それは私の空想裡に住む人物としても、当然選定さるべきの旅館であった。

或日私は、附近^{ふきん}の小さな滝を見ようとして、一人で夏の山道を登^{のぼ}って行^いった。七月初旬の日光は、青葉の葉影で明るくきらきらと輝^{かが}やいて居た。

私は宿を出る時から、思い切つて行李の中の帽子を被^{かぶ}って居た。こんな寂しい山道では、もちろんだれも見^みる人がなく、気恥しい思^{おも}いなしに、勝手な空想に耽^{ふけ}れると思^{おも}ったからだ。夏の山道には、いろいろな白い花が咲いて居た。私は書生袴^{はかま}に帽子を被^{かぶ}り、汗ばんだ

皮膚を感じながら、それでも右の肩を高く怒らし、独逸学生の青春氣質を表象する、あの浪漫的の豪壯を感じつつ歩いて居た。懷中には丸善で買ったばかりの、なつかしいハイネの詩集が這入って居た。その詩集は索引のエンピツで汚されて居り、所々に凋れた草花などが押されて居た。

山道の行きつめた崖を曲った時に、ふと私の前に歩いて行く、二個の明るいパラソルを見た。たしかに姉妹であるところの、美しく若い娘であった。私は何の理由もなく、急に足がすくむような羞しさと、一人で居るきまりの悪さを感じたので、歩調を早めながら、わざと彼等の方を見ないようにし、特別にまた肩を怒らして追いぬけた。どんな私の様子からも、彼等に対して無関心で居ることを装おうとして、無理な努力から固くなつて居た。そのくせ内心では、こうした人氣のない山道で、美しい娘等と道づれになり、一口でも言葉を交せられることの悦びを心に感じ、空想の有り得べき幸福の中でも、じも、じしながら。

私は女等を追い越しながら、こんな絶好の場合に際して機会を捕えなかつたことの愚を心に悔いた。

だが丁度その時、偶然のうまい機会が来た。私が汗をぬぐおうとして、ハンケチで額の上をふいた時に、帽子が頭からすべり落ちた。それは輪のように転がって行つて、すぐ五、六歩後から歩いて来る、女たちの足許に止まった。若い方の娘が、すぐそれを拾ってくれた。彼女は羞じる様子もなく、

「どうも……どうも、ありがとう。」

A 私の方へ走って来た。

私はどぎまぎしながら、やつと口の中で礼を言つた。そして急いで帽子を被り、逃げ出すようにすたすたと歩き出した。宇宙が真赤に廻転して、どうすればいいか解らなかつた。ただ足だけが機械的に運動して、むやみに速足で前へ進んだ。

だがすぐ後の方から、女の呼びかけてくる声を聞いた。

「あの、おたずね致しますが……」

それは姉の方の娘であつた。彼女はたしかに、私よりも一つ二つ年上に見え、伶俐な美しい瞳をした女であつた。

「滝の方へ行くのは、この道で好いのでしょうか？」

そう言つて慣れ慣れしく微笑した。

「はあ！」

私はキュウクツに四角ばつて、兵隊のような返事をした。女は暫らく、じつと私の顔を眺めていたが、やがて世慣れた調子で話しかけた。

「失礼ですが、あなた一高のお方ですね？」

私は一寸返事に困った。

「いいえ」という否定の言葉が、直ちに瞬間に口に浮んだ。けれども次の瞬間には、帽子のことが頭に浮んで、どきりと冷汗を流してしまつた。私は考えるヨウウもなく、混乱して曖昧の返事をした。

「はあ！」

「すると貴方は……」

女は浴せかけるように質問した。

「秋元子爵の御子息ですね。私よく知つて居ますわ。」

私は今度こそ大きな声で、はつきりと返事をした。

「いいえ。ちがいます。」

けれども女は、尚疑い深そうに私を見つめた。或る理由の知れないはにかみと、不安な懸念とにせき立てられて、私は女づれを後に残し、速足でずんずんと先に行つてしまつた。

私がホテルに帰つた時、偶然にもその娘等が、隣室の客であることを発見した。彼等はその年老いた母と一緒に、三人で此所に来て居た。いろいろな反覆する機会からして、避けがたく私はその女づれと懇意になつた。遂には姉娘と私だけで、森の中を散歩するような仲にもなつた。その年上の女は、明らかに私に恋をして居た。彼女はいつも、私のことを「若様」と呼んだ。

私は最初、女の無邪気な意地悪から、悪戯に言うのだと思つたので、故意と勿体ぶつた様子などして、さも貴族らしく返事をした。だが或る時、彼女は真面目になつて話をした。ずっと前から、自分は一高の運動会やその他の機会で、秋元子爵の令息をよく知つてゐると。そして私こそ、たしかにその当人にちがひなく、どんなにしばらく隠していても、自分には解つてゐるということを、女の強い確信で主張した。

その強い確信は、私のどんな弁駁でも、テツカイさせることができなかった。しまいには仕方がなく、私の方でも好加減に、華族の息子としてふるまつて居た。

最後の日が迫つて来た。

かなかな蟬の鳴いてる森の小路で、夏の夕景を背に浴びながら、女はそつと私に近づき、胸の秘密を打ち明けようとする様子が見えた。私はその長い前から、自分を偽っている苦悩に耐えなくなつてゐた。自分は一高の生徒でもなく、

B

貴族の息子でもない。

それに図々しく制帽を被り、好い気になって「若様」と呼ばれて居る。どんなに弁護して考えても、私は不良少年の典型であり、彼等と同じ行為をしているのである。

私は悔恨に耐えなくなった。そして一夜のうちに行李を調べ、出発しようと考えた。

翌朝早く、私は裏山へ一人で登った。そこには夏草が繁って居り、油蟬が木立に鳴いて居た。私は包から帽子を出し、双手に握ってむしり切った。

麦藁のべりべりと裂ける音が、不思議に悲しく胸に迫った。その海老茶色のリボンでさえも、地面の泥にまみれ、私の下駄に踏みつけられていた。

(萩原朔太郎「夏帽子」による)

(注) 1 一高……旧制第一高等学校。東京大学教養学部の前身。

2 アルト・ハイデルベルヒ……ドイツの作家、ヴィルヘルム・マイヤー＝フェルスター(一八六二～一九三四)による五幕の戯曲。一九〇一年にベルリンで初演された。

3 行李……旅行に用いる荷物入れ。

4 華族……一八六九(明治二)年から一九四七(昭和二二)年まで存在した近代日本の貴族階級。明治一七年に公布された華族令により公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵の五爵制が定められた。

問一 傍線部 a「或る私の好きな夏帽子」とあるが、どのような帽子か。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしな

さい。解答番号は 13。

- 1 海老茶色のリボンが巻かれた夏の自然の風景によくなじむ帽子で、「私」の容姿を洗練させるもの。
- 2 小説から連想されるような姿をした一高の学生たちが被る帽子で、「私」の憧れの象徴となるもの。
- 3 独逸の戯曲を読むときなどに「私」がよく身につけていた帽子で、「私」が最も愛用しているもの。
- 4 初夏の青葉や海などを思わせる一高の制定帽子によく似た帽子で、「私」に郷愁を感じさせるもの。

問二 傍線部 b・d・g・h・j と同じ漢字を含むものはどれか。次の 1～4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び

マークしなさい。解答番号は 14 18。

b 「マギらし」

- 1 貴重品をフンシツする。
- 2 カフンが多く飛ぶ。
- 3 フンスイの前で待つ。
- 4 有名なコフンを調べる。

d 「エンピツ」

- 1 遠くにイントツが見える。
- 2 エンセンにある公園。
- 3 アエンの元素記号。
- 4 役者のエンギに驚く。

g 「キュウクツ」

- 1 カイキュウ制度を設ける。
- 2 映画をみてゴウキュウする。
- 3 不正をキュウダンする。
- 4 キュウチに立たされる。

h 「ヨユウ」

- 1 毎月少しずつヨキンする。
- 2 台風のヨハで交通が乱れる。
- 3 キュウヨが引き上げられた。
- 4 ヨキせぬ結果になった。

j 「テツカイ」

- 1 合格するテツソクを教える。
- 2 テツガクの授業を受ける。
- 3 勝ち目がなくテツタイする。
- 4 テツヤでテスト勉強をする。

問三

傍線部 c 「七月初旬の日光」とあるが、「私」はなぜこの時期に日光を訪れたのか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 19。

- 1 同じ学校の生徒に他校の帽子を被っているのを見られたくなく、夏の日光であれば学友たちはおらず安心だろうと考えたから。
- 2 被らない帽子を購入してしまったことを最近まで悔いていたが、夏の日光はつまらない悔恨を忘れさせてくれると考えたから。
- 3 有名な小説家の作品に登場する舞台にどうしても行きたくなり、夏の日光は作品のなかでもとくに重要な場所だと考えたから。
- 4 帽子を被りながら自分が夢想する世界に浸りたい衝動に駆られ、夏の日光なら人目を避けつつ思いを遂げられると考えたから。

問四

傍線部 e 「特別にまた肩を怒らして追いぬけた」とあるが、このときの「私」の様子はどのようなものか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 20。

- 1 独逸学生の青春気分を味わおうとしていたのに、姉妹の登場により空想を乱されてしまい、邪魔者たちに対して無言の威嚇を見せている。
- 2 一高の洒落た夏帽子しやれを被って歩いていたところに、ちょうど姉妹が通りかかったので、自然な風を装いつつ自分の格好を見せつけている。
- 3 姉妹を見て気まずさを覚え、彼女たちを気に留めていないように振る舞いながらも、かえって強く意識してしまい身体がこわばっている。
- 4 見かけた姉妹のことが気になり、彼女たちが自分を一高の学生だと思い込んで話しかけてくれるのではないかと期待を高まらせている。

問五

空欄 A

に入る語句はなにか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 21。

- 1 快活に
- 2 恐る恐る
- 3 無遠慮に
- 4 浮き足立って

問六

傍線部 f 「宇宙が真赤に廻転して」とあるが、これは何を表現しているか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 22。

- 1 姉妹と出会って軽く言葉を交わしたことによる「私」の高揚
- 2 姉妹に自分から話しかけることができなかった「私」の気弱さ
- 3 姉妹が親切的な性格の人だったことを意外に思う「私」の驚き
- 4 姉妹の前で帽子を落としてしまった自分に対する「私」の怒り

問七

傍線部 i 「私は女づれを後に残し、速足でずんずんと先に行ってしまった」とあるが、このときの「私」の心情はどのようなものか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 23。

- 1 娘に一高生と勘違いされたことにより、自分が理想に近づけたような気がして嬉しく思う一方で、娘に話しかけられた気恥ずかしさのほうが勝っている。
- 2 娘からの問いかけに動揺してしまい、このままでは一高生のふりをしていることがばれてしまうかもしれないという不安や羞恥に耐えきれなくなっている。
- 3 娘から疑いのまなざしを向けられていることに気づき、一高生の真似事をしていただけで勝手に子爵の令息にされそうになったことに不快感を覚えている。
- 4 娘たちと会話できたことは嬉しかったが、後々になって自分の嘘を訂正するのはおつくうなのでこれ以上彼女たちと親しくするのはやめようと考えている。

問八

空欄 B

に入る語句はなにか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 24。

- 1 専ら さながら
- 2 宛ら い
- 3 況んや しか
- 4 然るに

問九

傍線部k「私は包から帽子を出し、双手に握ってむしり切った」とあるが、なぜこのような行動に出たのか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 25。

- 1 自分は庶民でありながら、一高の学生や貴族の身分に憧れて女性たちに華族のように振る舞っていたが、彼女の言葉でかえって自分が偽りの身であることを自覚してしまい、劣等感を刺激されたから。
- 2 自分は一高の学生でも貴族の息子でもないのに、華族のように振る舞い続けなければならない状況のなかで、自分の素性を偽りながら女性と接することの罪悪感や自己嫌悪に耐えられなかったから。
- 3 女性に好意を寄せられて好い気になっていたが、その後も彼女が自分の素性をしつこくたずねてくるので、自分は貴族だから好意を寄せられているのだと思い、相手のあさましさに怒りを覚えたから。
- 4 初めは女性に好かれているのだと思っていたが、彼女は自分の正体に気づきながらもわざと意地悪な質問を繰り返しているのだと分かり、結局自分は一高の学生や貴族になり切れないと絶望したから。

問一〇

この小説の作者である萩原朔太郎の代表的な詩集はなにか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 26。

- 1 於母影 おもかげ
- 2 智恵子抄 ちえこ
- 3 測量船
- 4 月に吠える ほ

問題三

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

芸術作品の制作において、つくり手である作者は、どのようなあり方をしているのだろうか。

「芸術作品」は或る種の精神的な意味や価値を有するが、見たり聞いたり触れたりできる事物でもある。つくり手の頭の中、意識の中で何事かが生み出されても、それだけでは作品を制作したことはない。作品の制作は、単に頭の中、意識の中のことでなく、或る種の価値をもつ事物を生み出すことの全体として捉えなければならない。とすれば「作者」も、単なる意識ではなく、身体を含んだ存在として考察されることになる。手で筆を握り、画面を見ながらカンバスに絵具を載せる画家、ろくろ、上の土を指や掌や腕を使って器に引き上げていく陶芸家、原稿用紙にペンを走らせ文字を書いていく小説家、ディスプレイを覗きながら右手のマウスを動かすCG作家でもよい……。いずれも、感覚―運動系としての身体を備えた「作者」である。

作品の制作は、「作者の頭の中での構想」と「手による忠実な実現」というように、二段構えの別々の過程で行なわれるものではない。「創造」はもっぱら精神によって行なわれ、身体がそれを機械的に実現するということではない。われわれはすでに第五章や第七章で、技術や素材が、作者の構想を実現するための単なる手段ではなく、制作過程の本質的部分にサンヨ^bすることを見た。「制作」や「創造」は、一般に「作者が作品をつくる」と能動態で語られ、作者がその能動の主体とされているが、技術や素材がはたらく具体的なつくる行為のただ中では、そうは言い切れない出来事がさまざまに生じている。

制作を、身体を備えた作者の具体的行為と捉えることは、「作品の制作」や「創造」の問い直しに道を開く。われわれは制作過程に能動でもない受動でもない中動的な位相を指摘した。本章は、その過程を、つくり手のあり方を中心に、より詳細に見ていく。それはまた同時に、事物としての作品をつくることでつくり手に何が起こるか、作品をつくることはつくり手にとってどのような意味をもつかを、問うこともある。(中略)

少なくとも近代において、作者は「自由な主体」であることが求められてきたように思われる。とりわけロマン主義的な芸術観からすれば、主観的なものの自由な表現に芸術の意義が見出されることから、作者は何ものにも拘束されずに「自由に」「己の欲するままに」制作を行なうべきだとされる。

確かに近代の「作者」は、それ以前のように抱え主や注文主の指示や要求に従うのではなく、独立した個人として自分の考えで制作を行なうようになった。少なくともそれが建て前である。その意味で作者は、以前より自由になったと言える。外部から与えられる課題や規制にシバ^dられることなく、やりたいように、自由に制作できるというわけだ。

ところで、先にも述べたように作品のつくり手である作者は、たとえ主観的なものから出発したとしても、最終的には客観的事物を生じさせなければならない。

A 制作は、つくり手の意識の外で、意識を超えた材料と関わる過程を含む。絵画制作における絵具も画布も、彫刻における粘土も石も金属も、音楽における楽器音や声も、ダンスにおける身体も、文学におけることばも、そのような材料である。材料には、それぞれ固有の性質があり、つくり手はそれが許す範囲内しか作品をつくれぬ。つくり手は材料を、完全には支配できない。材料ごとに、つくり手が望んでも得られないこと、できないことがある。材料が意識を超えており、制作に材料が必要である以上、制作は材料から何かしらの制約を受けることになる。その意味で、制作は自由ではない。作品の制作には何かしらの不自由がつきまとう。

この制約、この不自由は、芸術作品を制作する際の障害なのだろうか。制約が少なければ少ないほど、制作はうまくいくのだろうか。材料に由来する制約が制作にとってマイナスと見えるのは、作品の制作を、頭をはたらかせること（構想）と手を動かすこと（機械的実現）の二段階に分けて考えるからである。まずは自由な構想があり、その実現が物理的条件に妨げられるという図式だ。構想と実現が別個の過程であれば、制作の自由は意識のレベルにこそ完全なかたちであり、材料に由来する制約や不自由は構想を現実化する物理的手段の **B** ということになる。

しかし、つくり手が意識と身体の間で単なるたし算ではなく、制作が構想と実現の二段構えでないとしたら、制作の自由は、意識のレベルにおいてではなく、つくる行為全体の中で考えられなければならないだろう。行為における自由は、無制限な自由ではなく、常に何らかの制約を前提とする自由である。無制限な完全な自由がまずあって、それが制約によって切り縮められていくのではない。行為する主体は、与えられた環境の中で、自然的・文化的な条件の下、何事かを意図して実現する。それが行為の自由である。行為の自由は、常に、何らかの前提、あらかじめの制約との関係で発現する。とすれば自由と制約は、単純に相反するものではなく、むしろ絡み合っているのではないか。

その観点から、制作を考えてみよう。作者が制作の「主体」である以上、作品をつくることには自由がなければならない。ただしそれは無制限の自由ではない。材料はつくり手の自由を制限する。 **C** つくり手は材料からつくることの可能性を得る。フォションも『形の生命』で述べているように、つくり手は、材料からのウナガし、触発によって、作品をつくる。作家たちがしばしば語るように、つくり手は、材料に繰り返し触れ、それに馴染むことによつて材料の魅力や可能性を発見する。その材料でできること、やってみたいことが、徐々に見えてくる。新たな「意図」、新たな「構想」が生じる。つくり手にとって制作の可能性が広がるわけだ。これはつくり手の自由の拡大である。つくり手は、材料と関わることを通じて、材料との関係において、自由な制作主体になる。自らの自由

を獲得する。材料からの制約は、制作の自由を生み出すと言ってもよいだろう。

この自由は、つくり手が変わらぬまま、外からの制約を取り除くことでもたらされるものではない。つくり手自身の変化——身体レベルだけではなく精神的なレベルまで含む全体的変化——によって、自由が生まれるのだ。つくり手は、与えられた条件の下、具体的なつくる行為の中で変化する。そのことによって始めて、或る自由が手に入り、自由につくることができ、つくり手は自由な制作主体でありうるだろう。(中略)

制作の自由を行為において考えていくと、自由な制作を行なう制作主体としての作者は、つくることを通じて変化する者ということになる。主体の変化はどのように生じるのだろうか。ハビトゥスや身体的技術をめぐる議論が、そこに関わってくる。

稲垣良典^{いながきりょうすけ}は、古代ギリシアや中世のハビトゥス (habitus) 論を踏まえ、「自由を、人間の自己形成から現実^いに自由が実現されていく道にそって考察」(中略) している。そこで問題になるのは、ハビトゥス、すなわち広い意味での習慣である。稲垣は習慣を「獲得・形成された能力」(中略) と理解する。一般に習慣には恒常性や永続性が見て取られるが、自由との関係で言えば、むしろ人間を枠にはめて拘束するもの、自由と対立するものと考えられがちだ。それを「獲得・形成された能力」とすることは、「習慣」という語の通常の用法から外れている。しかし例えばひとが「慣れ」によって何事かを「D」なしうるようになることを思えば、習慣は何事かを現実になしうる能力と捉えることができる。自由と対立せず、むしろ自由を実現するものと考えられる。「慣れ」はまた、ひとが自身に働きかけ、さまざまな可能性をトウゴウ・組織化し、自分を環境に「合う」よう「調整」することから生じる。すなわち習慣という能力は、環境に応じた能動的な自己形成によって獲得される。稲垣によれば、この形成された能力が「行為の主体」である(中略)。

習慣 (ハビトゥス) という観点から考察される「行為の主体」は、自由の実現に向けて自らをかたちづくり変化していく主体である。主体は、環境に応じた自己調整によって、かたちづくられていく。人間は環境との関わりから、その環境において何事かを現実になしうるふるまい方、恒常性や永続性のある安定した行為の型をかたちづくる。それが能力としての習慣、ハビトゥスであろう。環境という制約との関係で、行為のかたちが定まってくる。環境が変化すれば行為のかたちも変化していく。この先の論を先取りするような言い方をすれば、可塑的^{注3}な人間が特定の環境(「制約」)に応じて自己を限定し特定のかたちになる。われわれは、習慣 (ハビトゥス) を、そのような自己限定によって生じる行為のかたちと理解することができるように思われる。ここで言うかたちは、目に見える形やリンカクのことではなく、より高次の、関係や調整の原理だろう。それによって始めて何事かをなしうる自由が実現するのであれば、自由は制約に呼応するかたち^jという限定から生じると言うことができるかもしれない。

(森田亜紀^{もりたあき}『芸術の中動態——受容／制作の基層——』による)

(注) 1 第五章や第七章……本文よりも前の箇所を指す。

2 フォション……アンリ・フォション(一八八一～一九四三)。フランスの美術史家。

3 可塑的な人間……『岩波 哲学・思想事典』の「習慣」の項で、稲垣良典は、「習慣を自由に対立させるのではなく、むしろ自由(の拡大)の軌跡として捉えるスコラ学的ハビトゥス概念の根底には、人間の自然本性はきわめて可塑的、あるいは未完成であるとの洞察が見出される」と述べている(『岩波 哲学・思想事典』七一〇頁)。

問一 傍線部 a「或る種の価値をもつ事物を生み出すことの全体として捉えなければならない」とは、どういうことか。次の 1～4 の

うちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 27。

1 作品の制作は、生み出された事物のみで評価するものではなく、作者が身体を使って作成する過程にも芸術的価値を認めるべきだということ。

2 作品の制作は、作者の頭の中での構想から始まるものだが、そこから身体や技術による忠実な実現を経て初めて完成に至るものということ。

3 作品の制作は、頭や意識の中で完結するものではなく、作者の身体や技術、材料をともなつてモノを生み出す過程全体を意味するということ。

4 作品の制作は、芸術家による特別な精神活動のほかに、日常における身体表現や感覚作用なども含む人間の活動全般を指しているということ。

問二 傍線部 b・d・g・h・j と同じ漢字を含むものはどれか。次の 1～4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び

マークしなさい。解答番号は 28 < 32。

b 「サンヨ」

1 借金をセイサンする。

2 畑に農薬をサンブする。

3 サンピが飛び交う議論。

4 彼女は優れたサンボウだ。

d 「シバられる」

- 1 人びとがバクシヨウする。
- 2 警察が犯人をホバクする。
- 3 バクゼンとしたイメージ。
- 4 友人に秘密をバクロする。

g 「ウナガし」

- 1 質問にソクトウする。
- 2 身軽にソクテンする。
- 3 犯人をホソクする。
- 4 血行をソクシンする。

h 「トウゴウ」

- 1 ガイトウが道を照らす。
- 2 布が光をトウカする。
- 3 デントウを重んじる。
- 4 価格がコウトウする。

j 「リンカク」

- 1 ジョウカクを見学する。
- 2 物事のカクシンを突く。
- 3 会社のエンカクを調べる。
- 4 新しいナイカクが発足する。

問三 傍線部c「そうは言い切れない」とあるが、ここで筆者はどのようなことが言いたいのか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 33。

- 1 どのような作者も、具体的な素材無しでは何かを生み出すことはできないということ。
- 2 作品をつくるという行為において、作者は必ずしも主体的な存在ではないということ。
- 3 技術や素材は作品を生み出す手段ではなく、作品から読み取るべき主題だということ。
- 4 具体的に何かをつくるということについて、技術や素材だけでは語れないということ。

問四 空欄 A ・ C に入る語句はなにか。次の1～8のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。ただし、同じ選択肢を二回選ぶことはできない。解答番号は 34 ・ 35。

- | | | | |
|-------|-------|---------|--------|
| 1 やがて | 2 例えば | 3 それとも | 4 なぜなら |
| 5 しかし | 6 もし | 7 したがって | 8 さて |

問五 傍線部e「材料が意識を超えており」とあるが、「材料が意識を超えて」いるとはどういうことか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 36。

- 1 材料は固有の性質をもっているので、つくり手の意図に必ずしも沿わないということ。
- 2 材料はつくり手が思いつかないような、より多様な利用価値を秘めているということ。
- 3 材料は作品のもととなるものに過ぎないので、つくり手に意識されにくいということ。
- 4 材料は客観的事物である以上、常につくり手の自由な発想を阻害しているということ。

問六 空欄 B に入る語句はなにか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 37。

- 1 目的
- 2 結実
- 3 不備
- 4 可能性

問七 傍線部 f 「作品をつくることには自由がなければならない」とあるが、筆者は「作品をつくること」の「自由」とはどのような

ものだと考えているか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 38。

- 1 無制限の自由ではなく、構想を実現する過程のなかでさまざまな制約により切り縮められていくもの。
- 2 あらかじめ設けられた条件下で発揮される自由であり、つくり手が材料と関わるなかで獲得するもの。
- 3 常に何らかの制約を前提とする自由であり、構想を現実的なレベルに練り直すことで見出されるもの。
- 4 材料の魅力や可能性を発見することで拡大する自由であり、作者を制作の「主体」から解放するもの。

問八 空欄 D に入る語句はなにか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 39。

- 1 継続して
- 2 意のままに
- 3 パターン化して
- 4 やむを得ず

問九 傍線部 i 「習慣（ハビトゥス）」という観点とあるが、この観点についての筆者の論旨はどのようなものか。次の 1 ～ 4 のうち

から最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 40。

- 1 習慣（ハビトゥス）は、決まったふるまいの繰り返しによって固定された行為の型であり、人間の自由は、行為の型に拘束された自己を解放することではじめて実現される。
- 2 習慣（ハビトゥス）は、人間を枠にはめるという本来の「習慣」とは異なる意味の言葉であり、人間の自由は、周囲の制約を個人が前向きな意味に捉えることで実現される。
- 3 習慣（ハビトゥス）は、環境の制約によって受動的に刷り込まれていくものであり、人間の自由は、環境に限定された自己がころうじて何事かをなしえることで実現される。
- 4 習慣（ハビトゥス）は、環境に応じた自己形成によって獲得される能力であり、人間の自由は、環境の制約にもとづいてかたちづくられた自己のあり方を通して実現される。